

〔翻訳〕

## ドイツ考古学研究所 1929－1945

### －ナチス独裁下の調査研究－

クラウス ユンケル 著

酒枝 徹意 訳\*

ドイツ考古学研究所 (D.A.I.) は、1829年に創設されたが、その歴史で最も危機的局面をワイマール共和国の後半期とナチス期の期間に経験した。経済的不況による財政上の諸問題と第三帝国期の研究所の研究領域に影響を与えようとする種々の試みは、研究所の学問的独立に対し重大な脅威となり、実際にその存在そのものを脅かした。以下の研究は、組織の執行部であるその〈本部 *Zentraldirektion*〉によって、その国際的研究施設としての地位を維持するために取られた政策を検証することによって、この経済的、政治的混乱期の研究所の歴史を際立たせてみたい。1929年から始めることは、研究所に関するこれまでの出版物 (Rodenwaldt 1929; Bittel et al. 1979; Wickert 1979) にも部分的に記されているが、それは、特に事柄自体によるのであり、即ちナチスによる政権の獲得以前の4年間になされた研究所の構造に影響を与える種々の決定が、その将来の展開に対し広範囲な結果を齎したがために、である。

ドイツ考古学研究所〔1945年までの正式名は、ドイツ帝国考古学研究所 *Archäologisches Institut des deutschen Reiches*であった〕の注目に値する歴史についての多くの見解の内、1933年以降のドイツの先史時代の役割に関する論争のみが、学問的議論の対象とされてきた (Bollmus 1970: 150-235; Unverzagt 1985; Arnold 1990)。しかしながら、固有の考古学的な種々の見解に焦点を合やすよりも、むしろ、ナチス体制が科学的な諸々の関心を統制するこ

---

\* Tetsui SAKAEDA 本学文学部教授 (人文学科)

とを追求したのはどうしてなのか、というはるかに一般的な疑問に焦点を合わせていく傾向が、そうした研究にはあった。以下の研究は、一可能な限り大変短いテキストの中で一研究所の見地からその状況を検証することで、このアンバランスに再度取り組もうとする。わたしの調査結果は、ベルリン本部のアルヒーフの行政的ファイルの中に見出された情報に主に基づいており、このアルヒーフは、また多くの重要な研究者によって寄贈された遺産を含んでいる。

以下に論じられる様々の事柄は、1929年における研究所の構成に関する短い説明を最初にすることによって、一番良く理解され得る (Rieche 1979: 183-95, document no.59)。1870年、研究所の地位は、民間研究団体のそれから外務省管轄の国立組織に変更された。実際の考古学研究は、一それは今日でも変わらないが一国外の支部、即ちローマ支部 (1829年創設) とアテネ支部 (1874年)、それにフランクフルト a.M.にあるローマ＝ゲルマン委員会 (RGK. *Römisch-Germanische Kommission*. 1929年創設) により大方実施されてきた。多くの理由で、しかし特にその諸活動が、ドイツ国内を中心に行っているが為に、RGKは、自らの規定を持つ程に、DAIの中で非常に強い独立性を享受している。これらの研究組織を統轄しているのが、〈本部〉であり、20人の一自発的な一メンバーにより構成され、法によって定められた中央機関であり、その大方は、古典考古学やそれに関連した分野、例えば古典文献学や古代史の教授たちであった。〈本部〉は、所長によって代表される。〈本部〉は、考古学研究に関するあらゆること、特に発掘調査と出版物に関して裁断を下さねばならない。このことは、地中海地域の支部によって指揮される様々の企画やたとえば、オリンピア発掘のように、直接的に〈本部〉によってなされる少なくともは数々の企画の何れにも当てはまる。第二の最も重要な責任領域は、人的なそれである一特に、〈旅費奨学金 *Reisestipendium*〉の候補者選びと同様に、国外の支部の支部長を選ぶことである。この1年単位の旅費奨学金は、大学院生に貸与されるが、それは、彼らが、その1年をその古代の地を訪れ、過ごせるようにするためであるが、見るごとく、その旅費奨学金〔\*を受けること〕が、多くの者にとって、考古学者として成功するキャリアを上る階段の第一歩を表わしていたのだ。

### 1929年から1933年

1929年から第三帝国開始に至る歳月は、研究所内における非常に多様な展開によって特徴づけられる。研究所の活動は、主に国外であるゆえに、第一次世界大戦の敗戦後のあらゆるアカデミックな研究所に影響を及ぼしたドイツの孤立化によって、DAIも、特に激しい打撃を被った。しかし、その状況は、徐々に通常に戻っていった。ローマおよびアテネの国外部門のドイツへの返還が、活発な〈以前の敵国とさえの〉学術交流の回復を齎した。この戦後の時期の絶頂期は、研究所創立100周年を祝うために1929年ベルリンで催された集会であった。諸外国からの沢山の参加者は、ドイツのローマおよびアテネの考古学研究所が再び国際的な集団の中に受け入れられた、ということをはっきりと証明していた。

しかしその同時期、研究所の財政的資源は、ドイツにおける経済不況によりかなり縮小されていた (Marchand 1966:272-4,295-8) しかし、その状況は、別の色々な研究所とか様々の私的個人からの寄付金によって幾らか緩和されていた。1920年代の終わりまでには、研究所は共に閉鎖されるという深刻な危険な状況になるほど、その状況は悪化していた。このことは、1929年にその法的地位が変更されることで避けられたが、活動状況は、依然として厳しいものであった。

1929年には、それと共に更にある変化が齎された。DAIは、二つの新たな研究所を管轄することになった。DAI全体の今後の発展にとって、イスタンブールとカイロに支部を得たことは、非常に重要なことであった (Bittel 1979:65-79;Kaiser 1979:93,100-105)。

何故ならば、研究所の外国での活動は、それまでは、殆ど全く古典ギリシア、ローマ文化の研究に絞られていたが、カイロとイスタンブールに支部を加え、利用することは、研究所の調査範囲をイスラムおよびトルコ文化と共に小アジア、近東の初期の歴史にまで拡大することが決められたからである (Rodenwaldt 1929:50-51;Curtius 1950:452)。この研究所の活動範囲の拡大は、特にその当時のDAI所長であったゲルハルト ローデンヴァルトによる長期計画の結果であった (Hausmann 1988)。彼は、全ての古代文化を含めるべく研究所の関心領域を広げることで考古学の国際的傾向に活発に倣おうとしていた。彼の構えは、その時代のドイツ考古学界内で最も影響力を持っていた傾向の一つである、いわゆる〈第三のヒューマニズム〉即ち、ギリシア-ローマ世界の優位性を支持するとい

う傾向に真向から反対するものであり、いっそう驚くべきものである。ローデンヴァルトは、明確な姿勢を保持していた。学者としては、彼自身語っているように、「歴史の他のいかなる時代よりも、古典期の絶対的な優位性を確信」していた。しかし、DAI所長としては、異なる見地、即ち「彼の管理下の研究所は、あらゆる研究分野を支援するが、何らかのイデオロギーの砦であってはならない」という見地を取ることを余儀なきことと彼は感じていた（あらゆる学問を支援する研究所であり、世界観のための宣伝団ではない。1929年12月21日付M.Schede宛書簡からの引用：StB）。この見地は、後に殊の外重要であることが明らかになった。1920年代および30年代のドイツ考古学界での〈ギリシア文化賛美の衰退〉が語られる時（Marchand 1966; chapter10）、この衰退は、今日〈世界考古学 World Archaeology〉として知られている今日的な学問概念に向かう傾向が既に強いものとなっていて、その必然的結果であったと思われるに違いない。

1932年ローデンヴァルトは、大学での教職に復帰するために研究所の所長を降りた。彼の後継者選びは、議論を呼んだ。多くの若い候補者たちが、任命されることを拒否し、結局当時既に68歳であったテオドール ヴィーガントTheodor Wiegandが選ばれた。この選択は、多くの者に問題であり、かつ彼の年齢ゆえに相応しくないと見られた。ベルリン博物館の古代部門の元責任者として、また指導的政治家や経済人たちとの並外れた人脈の持ち主として、ヴィーガントはたいそう影響力を持った人物であり、〈並みの〉考古学者とは全く異なっていた（Watzinger 1944:446-9;Wenk 1985:30-36;Bittel 1988a）。しかし、彼が任命されることに対して反対させた最大の理由は、彼の野心であり、権力欲であった。ヴィーガントが、賢明な方策を発展させる才能の持ち主であることは認められる一方で、所長の最優先の仕事は、かなり世俗的な行政上のことであることを認める彼の周到さを多数の者たちが疑問視した。

1932年10月ヴィーガントが所長に選ばれてから数ヵ月後、政治状況が、全く変わってしまった。適任者に、研究所が託されたのかどうかという問題は、突然全く新たな次元を帯びることになった。多くの見方は、もっと良い選択は、有り得なかったであろうというものであった。ナチスによる権力奪取に続く危機の中に投げ込まれてしまった研究所を助けるために、ヴィーガントは、彼の使えるあらゆる可能な手段を用いた。彼の野心的性格は、今一度、それに相応しい挑戦を認

めたのだ。ヴィーガントは、1933年以降に起こっていることを完全には理解していなかった、と後にローデンヴァルトは記しているが、新体制の中の相応しい人物に近付く方法を他の誰一人持たず、その体制からの様々の要求を公に疑問視することが出来る立場にも、他に誰一人いなかったという事実は残っている(Weitzmann 1994: 71)。しかしながら、参照した史料とか記録類のどこにも、ヴィーガントが、ナチス・イデオロギーに共感していたことを示唆しているものは存在していないことが、同時に留意されねばならない。

### 画一化 *Gleichschaltung*.

1920年代から1930年代の初めまでの期間、国家の経済的諸問題の結果、十分な資金を獲得するための戦いを毎年していたけれども、研究所は、包括的な立場を強化することがなお可能であった。しかし、ナチスの権力奪取とともに、その状況は、完全に変わってしまった。公立施設として、研究所の予算は多かれ少なかれ保証されていた。しかし、この安定性が、イデオロギーにより動機づけられた様々のグループからの攻撃に、研究所を晒らせることになり、かくしてその活動を危機のうちに置くことになった。その結果、研究所の調査計画に至るまで色々変化したことを論ずる前に、新たなナチス体制が、画一化の原則を、学術的施設としての研究所の日常的活動を統制し、影響力を及ぼすのに、どのように用いたのか示したい。

### 〈指導者原理 *Führerprinzip*〉 — 様々の布告

1934年5月、外務省が適当であるということに代えて、研究所は、新たに創設された科学・教育省に統合されることを、ヒトラーは布告した。宣伝省内にDAIを—外務省の文化部門も共に—位置付けるという最初の構想は、上手くいかなかった。わたしの知っている限りでは、その変化を説明している公式声明は、なされていない。国内の諸問題に責任を負う省の管轄下に研究所を置くことに際しては、研究所を、ギリシア・ローマや他の〈外国の〉文化への熱中から、ゲルマン人の考古学的遺産の研究に向けることが期待されていた、ことが考えられる。

1934年2月、第三帝国期のあらゆる他の研究所も共に同様であるが、DAIは〈指導者原理〉を導入することを余儀なくさせられることを認めた布告に、ヴィー

ガントは署名した。「本部ハ、ソノ会合ニオイテ、投票並ビニ諸決定ヲ為スコト能ワズ。今後、本部ハ純粹ニ相談的役割ヲ果タス。ローマ＝ゲルマン委員会モ、カクアルベシ…」(Rieche 1979:198-9 document no.62)。このドキュメントは、次の文章で終わっている。「如何ニ状況ガ変化シタルニセヨ、重要ナルコトハ、本部ノ経験豊ナルモノタチノカンコクニ、ナオ従ウベキトアルガ、コレニ留意スル必要ナシ」と。換言すれば、所長は、研究所の〈フューラー *Führer*〉になったのであり、〈本部〉は、その最高決定機関としての權威を放棄してしまった。これまで存在してきた民主的機構は、少なくとも公的には専制君主的なものに取って代わられた。期待されてはいるが、この布告を拒否しているドキュメントは、全く知られていない、しかし、決定を下す実際の遣り方は、大方変わらず仕舞いで、一般的に、所長の諸決定は、〈本部〉の承認を以って適用されていたことを示唆しているものが存在している。

〈フューラーの布告 *Führer-Erlass*=decree〉に述べられているように、新たな〈イデオロギー的諸原理〉(国家的・世界観的基礎)を取り入れるために研究所の定款を書き換えることが必要であるとは、何ら考慮されていないという点は、吃驚することだ。同様に、所長の後任を推薦するための新たな規則を作成するための努力も何も為されなかった。1936年12月のヴィーガントの突然の死去は、〈指導者原理〉は、明確に後任の選挙を禁じているにもかかわらず、候補者を指名しなければならないという厄介な立場に、〈本部〉を置いた。この問題は、〈本部〉の多数が、最も相応しい候補者と見なしていたマルティン シェーデ Martin Schedeは、ヴィーガントの選んだ者であると所轄省に助言することで解決され、彼が然るべく任命された (Bittel 1988b)。

結論的に言い得るのは、DAIの内部的構造は、1933年以降ただ周辺的なところで変化したに過ぎなかったということである。所長の賛同を得て、〈本部〉にその決定権を放棄することを〈指導者原理〉が強いた限りにおいてのみ、〈画一化〉は起きたに過ぎなかった。一方で、DAIのような研究施設は、ナチス体制の全般的文化政策の中では、重要な役割を果たしたことを、事態が明らかにしている。DAIが、直ちに厳しい統制と続く組織の再構築に服したのは当然であろうと考えるのは、誤っているようだ。そうではなく、ナチス体制は、比較的無頓着な態度を取り、そのことが、〈本部〉が、多くの点で以前と同様の遣り方を

続けることを可能足らしめたのであった。

### 人事問題

相当程度の独立と介入という事態が、人事に関わる様々な決定に影響を与えた。原則的には、状況は他の研究施設のそれと大して変わらなかった。より厳格な規定という方針は、候補者を選ぶ際には、学問的能力よりはむしろ政治的学習のみで決定されねばならない、というようなことを必ずしも意味していた訳ではなかった。この点は、上述された〈旅費奨学金*Reisestipendien*〉によって説明され得る。もちろんアーリア人の血であることが前提であったが、また別個の規準も用いられていたのであり、そのことは、弟子のユダヤ人学生たちに、学位を与えることを偶々承認した候補者が、1938年排除されたことから明らかである。だが、ナチス体制に共鳴すること自体は、何ら成功することを保証してはいなかった。1935年に奨学金を付与された者たちの中の3人は、数多いナチス組織の何れとも全く関係を持っていなかった、しかしまた別の3人は、党员である1人を含め、全て政治的に行動的な応募者であったが認められなかった。この奨学金付与に成功した候補者たちのリストから判断すると、状況がますます厳しくなるより後期になってさえ、研究所は必要な学問的能力を持った者たちに奨学金を付与するその方針を、大方守ることが可能であったように見える。だが一方で、にもかかわらず、或る場合には、奨学金を付与する際に政治的に党员であることが機能するであろうことも大いにあり得るのである。

学問的原則と政治的便宜主義とを一致させることは、しかしながら、必ずしも常に容易なことではなかった。1938年には、女性には、最早旅費奨学金の資格がないことを、所轄省が決定した。この決定は、規定19に基づいたものであったが、そこでは、旅費奨学金の役割を、指導力を涵養するための手段—それは、女性たちには、殆ど所有したり、必要性が有り得ない性質のもの—と規定されていた。しかしこの法規は、公にされなかったので、女性たちは、応募し続け、戦争の後半期間でさえ、シェーデによって推薦を受ける者さえいたのであった。1943年には、はっきりと「前線ノ兵士ハ無視サレテイル、トユウ印象ヲ与エテシマウ」と云う理由で、女性が奨学金を貰うことは禁じられねばならない、と所轄省は声明を出した（1943年2月10日付きのシュライエルマッハーW.Schleiermacherへの



シェーデの書簡：DAI13-21)。ところが僅かその1年後、シェーデは、2人の女性に上手く奨学金を獲得しているものであり、しかもその1人は、既に拒絶されたことのある者であったが、彼女たちの戦争への市民的寄与は、男性たちが理解しているものに等しいものであるとシェーデは論じていた。

ナチスによる権力奪取によって、研究所の幹部の中で、2人の者が、ユダヤ人排斥の効果を直ぐに感じるようになった。ゲルハルト ベルスGerhard Bersuは、1935年までRGKの委員長としての彼の地位を保持していたが、この年、彼はDAIに彼のために特に創設された別の地位に就かねばならなくなり、最終的には、1936年英国に亡命した（Bollmus 1970:156-62;Evans1989）。ゲオルク カロ Georg Karoは、彼が退職すべき年齢に殆ど達した1936年までアテネ支部の支部長に留まっていたが、それは、最高レベルの人脈を意味していた。彼もまた亡命した（Lullies 1988）。両者の場合は、良く記録が残っているから、ここで詳細に論じる必要は無い。同じことは、カロの後任を任命する際の論争にも当てはまる（Kyrieleis 1979:47-8;Jantzen 1986:48-50）。研究所も所轄省も両者は、アーミン フォン ゲルカンArmin von Gerkanに決定し、彼は結果的にローマからアテネに移動したが、しかし文書による確認は受け取ることはなかった（Naumann 1988）。だから、ナチス党の高い地位の党員であるヴァルザー ヴレーデWalther Wredeに、その地位が与えられたことを知ったときの、彼の驚きは分かり得ることだ。この決定を、誰も覆すことは出来なかったし、今やドイツは、学問的能力など時代遅れなものと考えられている国だと見られるであろう、というシェーデの抗議でさえも覆すことは不可能であった。

1937年にローマの副支部長に任命された考古学者ジークフリート フックス Siegfried Fuchsの場合については、あまり良く分からない。任命される前は、フックスは研究助手であったが同時にナチス党 NSDAPのローマ支部の支部長でもあった。彼は、優先的な候補者ではなかったが、政治的な様々の理由から優先順位の三番目に挙げられていた。色々な外交的チャンネル（ドイツ大使館、宣伝省）からの干渉の結果、別のより適任な2人の者のいずれでもなく、フックスが任命された。この任命は、広範囲に亘る様々な結果を齎した。フックスは、単に副支部長に過ぎなかったが、彼は、研究所の研究上のプログラムを立てる責任を与えられ、それ故支部長のフォン ゲルカンは、結果的に行政上のトップに



降格させられたのである。

だが、こうした様々の出来事にもかかわらず、記憶されるべきは以下の点である。即ち、本当の問題は、党员メンバーと非・党员メンバーの間にあったのではなく、実は伝統的な方向を向いた考古学者たちと流行の人種理論に従って過去を解釈しようと努めることで、考古学を誤用しようとしていたかなり沢山の偽・素人考古学者たちとの間に存在していたのである。幸いなことに、研究所は、後者のグループの者たちによる、その権威を傷つけようとする試みから、自らを守ることが出来た。〔\*アテネ〕支部長であるヴレーデも〔\*ローマ〕副支部長フックスも、党の人脈によってその地位を獲得したが、彼らは、問題なく真面目な考古学者だった。実際、ヴレーデは、1927年以来の研究所の所員であった。ナチス党の党员が重要な地位に就くという事実は、学術上の政策の転換を、必ずしも自動的に齎すわけではなかった。

#### 所員たち

DAIは、その組織のメンバー〔\*所員 *Mitglieder*〕として、著名なドイツや諸外国の考古学者を定期的を選んでいった。第一に個人に対する名誉ある地位である一方で、研究所もまた利益を受けたのである。何故なら、結果として生まれる国際的な学者たちのネットワークは、国際レベルでの研究所の権威ある地位を反映したし、また外国でのドイツの考古学者たちの活動に対する支援を齎したからである。

国際的な認知を獲得したいという願望は、ナチス体制期に、単にユダヤ人所員を選ぶことが禁じられただけではなく、ユダヤ人出身所員の追放も必要であるとされた時、特に微妙な問題であることが明らかになった。1938年の終わりにかけて、ドイツ帝国出身の全てのDAI所員は、彼らの家系についてのアンケートに完全に答えることを、所轄省から命令された（1938年11月23日付き布告：DAI 12-41）その結果、17人の考古学者が、その内12人はユダヤ人と認められたのだが、ドイツおよび国外の900人強の所員から排除された。

所轄省から出された布告は、明確に、「コノ規定ハ、他国籍ノユダヤ人ニハ適用サレルコトナシ、何故ナラバ、ドイツデハ、彼ラハ、外国人ナレバナリ」と記していた。研究所は、その外国人所員の宗教的、政治的信条を調査することを強

いられはしなかったが、しかし、大変不愉快な状況に直面することになった。即ち〈人種法Rassengesetze〉に、一方で従うことを強制され、他方で国外ではそれらの法の履行を妨げることを求めることが、共通認識になっていたからだ。研究所にとって、こうした状況は、外国人所員が、その構成員を辞めてしまうようなことが起きた時、－1945年までにおよそ18人がそうしたが－特に厄介なものになった。多くの者が政治体制への憎悪を、その思い切った決断の理由として挙げたのであるが、研究所は所轄省の指示に従い、こうした非難に応えるようなことはせず、あたかも辞めたのは純粹に個人的理由からであったように振舞った。いわば、二つの異なる規定が通用していた。即ち、ドイツ人所員は、人種法の厳格な規定に服さねばならなかったが、一方外国人所員は、その血とか政治的所属は考慮されず、表向き寛容に扱われたのである。このような矛盾した遣り方は、むろんどんな権威主義的体制にも特徴的なものと考えられているが、この場合は、言及されるに値する特別のものである。その理由は、研究所が直面したジレンマは、即ち研究計画の決定という別の、はるかに重大なジレンマを特徴としていたからである。

### ドイツの先史時代をめぐる論争

ドイツの先史時代の研究は、二つの異なる方向に分裂していた。この分裂は、世紀の変わり目には既に明らかになっていたが（Unverzag 1985; Marchand 1996:152-87）、少なくともその当初は、地理的な地域が摩擦の根本原因であった。ところが、方法論とその背景の問題も、同様に論議を呼び起こすことになった。〈ローマ＝ゲルマン委員会〉（RGK）は、外国にある研究所支部の仕事が増えていたことで、〔＊ドイツ国内の〕ローマの遺跡の発掘調査も、ドイツ南部、西部の先史時代の遺跡の調査研究も共に行っていた。ドイツの先史時代は、初期ヨーロッパ文明の正に一つの局面を示しており、この時代の真の重要性は、地域や国境の彼方まで調査することにより確立され得る、という見解の最も有力な擁護者が、研究所であった。

ドイツの多くの先史時代史家たちは、このRGKの国際的な方向性を認めなかった。ローマの遺物が、その地の文化遺産の構成要素になっていない中部および東

部ドイツ（いわゆる *Germania libera*）の地域では、特に、ドイツの先史時代の調査研究が、不当に蔑にされていると感ぜられていた。20世紀の最初の数十年、民族主義的諸団体と一緒にあって、先史時代研究に、絶対的な優先権が与えられるべきだと要求し、論争は、ますます悪意に満ちたものになっていった。同時に、古典考古学者たちは、激しく非難されたが、その理由は、彼らは、初期ゲルマン文化を一種の〈暗黒時代〉であると、少なくとも間接的に述べることで歴史を偽造していると、そのように論じられていたのである。実際、侮蔑的言葉 *Römling*（ローマかぶれ）が、古典学者たちに向かって使われ、〈ローマ〉は、地中海と同義語となり、それは、真のゲルマンの諸価値とは正反対のものとされていた。

この長期に亘る論争を考察することで、はじめて、ナチスによる権力奪取に続く特に厳しい批判に、何故DAIとRGKは晒されねばならなかったのか、その理由を理解することが可能になる。ナチス・イデオロギー主義者の中で最も影響力のある一人であったアルフレッド ローゼンベルク Alfred Rosenbergの、いわゆる後に〈ローゼンベルク当局 *Amt Rosenberg*〉と呼ばれた一派は、RGKは、解散されるか、最小限に規模を縮小され、新たに〈ドイツ先史帝国研究所 *Reichsinstitute für deutsche Vorgeschichte*〉が設立されるべきことを要求した。公式のイデオロギーに沿ったあらゆる訓練を施すための機関としてこの研究所は、実際役立つであろうと。1936年、ローゼンベルクと彼の一派は、ヒトラーを説得し、彼らの構想に最終的に同意させたが、彼らのナチ的傾向の研究所は、実際には設置されなかった。かくして、ドイツの先史時代を調査研究するRGKと同様のこうした研究所等の地位は、結果的に変わらず仕舞いであった。ローゼンベルクの計画が失敗した理由を正確に立証することは、非常に困難ではあるが、ナチスの学術政策の中でのDAIの地位を理解する助けになる更に数多くの見方を例証することが可能である。

外部からの影響から自らを守ろうとして、研究所は多くの防御手段を実施したが、結局、それ程効果があるという訳ではなかった。ヴィーガントは、二つの全く異なった方法を展開したが、その何れも問題であった。たいそう思い切った一しかし余りにも楽観的な一提案の一つは、ドイツ全土を活動範囲とする新たな、いっそう大きな国内部門を設置し、かつRGKの名前から〈ローマ *Römische*〉という非難されている言葉を取ってしまうことであった。だが、DAIが、中心は

古典学者の研究所であり、ドイツの先史時代という熱く論争されている領域にいつそう影響力を振るうことは絶対に認められないことであった以上、この解決方法は、全く非現実的であった。第二の、そして余り見栄えのしない提案は、研究所のRGKとその活動分野との関係を断つことであった。しかしこのことは、DAIを国外の考古学研究のための研究所に縮小し、さらに研究所が、ドイツ国内におけるプロジェクトを実施することが不可能になろうという事実は、研究所の存在そのものを危機に陥れてしまうことになったであろう。

研究所の地位を維持していく上で、上に述べた提案よりもはるかに大きな役割を果たしたのは、個人的人脈であった。ナチス体制が、ヴィーガントの中に研究施設の所長とか優れた考古学者とかではなく、一人の国家的名声のある人間を見ていたことが、研究所にとり特に都合が良かったのである。ヴィーガントは、かくのごとくドイツ考古学研究所の件を推し進めるために、あらゆる機会を捉えた。たとえば、研究所の働きに不信感を持っている色々なナチスの政治家たちの試みに関し、1934年11月、ヒトラーに個人的に報告する機会を利用することを躊躇しなかった。彼のイニシアティヴは、望んだ結果を生んだ。ローゼンベルクの計画は、失敗に帰した。一少なくともその時には。〈ドイツ先史帝国研究所〉の創設をヒトラー自身が承認するのを躊躇った理由の一つは、彼の個人的な古代ギリシア、ローマに対する賞賛の気持ちであった。彼が、党のイデオロギー主義者たちが推し進めていた初期ゲルマン文化のささやかな遺物よりは、古典古代にはるかに興味を抱いていたことは、周知のことである（Kater 1974:23; Losemann 1977:17-21）。こうした二つの全く相異なる見地、一ヴィーガントの政治的名声の賭けとヒトラーの古代、特にギリシア芸術に対する情熱—このことは、それに従ってドイツの先史時代に関わる様々の研究所が、統合されるべき明々白々な基準が存在していないということの徴である。特にナチスの文化、学術政策に関して、このような曖昧さがあるのは、ナチス国家が果していたやり方で典型的なものではない。特に関係せる省庁においては、注意深く曖昧にその責任範囲を保持することによって、—この点は、いかなる独裁体制でも、どうでも良いことではなかったが、何れの集団も過剰なイニシアティヴや独立性も示すことは実際的には出来ないのであった。

上述されたように、1933年以降、夫々の主義主張の争いが、教育省の一部と

してのDAIとローゼンベルク一派との間に存在した。1935年、SS〔\*Schützstaffel;ナチス親衛隊〕が、ドイツの先史時代に対する興味を膨らませ、自ら発掘を始めると、この情勢はますます複雑になった。この考古学的活動は、〈SSの発掘部門SS-Ausgrabungswesen〉と、ヒムラーがその個人的興味を行動に移したSSの学術部分である、いわゆる〈父祖の遺産Ahnenerbe〉によって組織されたものであった(Bollmus 1970:167-72,178-85;Kater 1974:17-24,139-40;Losemann 1977:118-39)。特にローゼンベルクの計画した〈帝国研究所〉が、先史時代研究に専心する別のナチス的研究所を不必要としてしまうであろう時、逆説的ではあるが、そのことがイデオロギー的に止めを刺すのは〈ローゼンベルク当局〉であり、〈父祖の遺産〉の主なる敵対者であったDAIではなかった。1936年にヒトラーが、ローゼンベルクのプランを最終的に承認した時までに、DAIとSSの代表者たちは、既に親しい関係を結んでいた。両者の関係は、質的に高い考古学者たちとDAIの所員とが、〈SSの発掘調査〉に参加を始めていたという事実によって促進された。ドイツの先史時代の調査に競い合っていた三つのグループの中で、ヒムラーが、疑いなく最も熱心であったが、ローゼンベルクもDAI(即ち、教育省)の何れも、敢えて彼の位置に異議を唱えることをしなかった。結果的に、三つの集団の全てが、全体的な指揮を執ることもなしに、自身の興味ある事柄を、自主的に追究したのであった。ローゼンベルクは、彼の〈帝国研究所〉に同意を得ていたにもかかわらず、戦争の勃発が彼の計画をだめにしてしまったが、その理由は、その時以来、新たな組織を作ることは、最早許可されなかったからであった。

### 研究所の国外の調査研究と「文化政策」

DAIの国外での諸活動は、ドイツ国内における場合よりは新体制のイデオロギー的信念に、あまり影響を受けなかった。にもかかわらず、研究所の学術的側面をかなり変えてしまう多くの変化が、1933年以降に起こった。以下では、国外での研究所の文化的、政治的役割について、特にその調査研究における重要な変化が、見られるかどうか、検証してみたい。

## 発掘調査の継続とその実力の誇示

現になされている、また幾らかのケースでは、長期間に亘る発掘と調査研究計画は、継続するべきであるという点では、研究所も政治体制も完全に合意していた。この問題に関し、研究所の学術的な様々な関心事は、ドイツの文化活動の諸原則は1933年以前から変化しないままであるということを証明したい政治的要請と一致していた。DAI所員に適用されたシステムとの類似性が、明らかであった。即ち一方で、ナチス・イデオロギーは、ドイツ国内の組織からは、ユダヤ人は排除されるべきことを要求したが、また他方で、偏見を持たず、寛容であるという印象を作り出そうとして、外国人所員たちには、こうしたやり方を放置したままにすることが望まれていた。

オリンピアの発掘再開が、政治的には最も威信を賭け、考古学的にも最も成功した企画であったのは疑いない。この構想は、1936年のベルリン・オリンピックから生まれた。国外の発掘に余りにも多くの金が費やされるという主張と相殺すべく、この贅沢な企画のための基金は、いわゆる〈総統財源 *Dispositionsfonds des Führers*〉ヒトラーの自由に出来る財源から拠出されたのであり、普通の手続きのように、教育省からではなかった。それ故に、この発掘は、〈総統の発掘 *Führer Excavation*〉になり、結果的にDAIは、公式的には責任を持たず、単にその作業を—含まれる全ての混乱した状態を監督する責任を負ったに過ぎなかった（Bericht 1937:preface,1-5;Kyrieleis 1979:47-8）。様々の予想に反して、この計画を具体化することに関連して、外部からの指示は全く発せられなかった。むしろ、この発掘がドイツ帝国のイデオロギーの見本というよりは、むしろ帝国にとってショーウインドーとして用いられ得るという点は、ヴィーガントの推薦に従って、発掘責任者は彼の学問的質にのみ基いて選ばれることを、ヒトラー自らが命令した教育相に対する指示から明らかである。政治的關係が、優先されることはなかった（1936年8月10日付き教育相への書簡；*Der Führer hat nach Kenntnis der Darlegung Wiegands die Auffassung vertreten, daß für die Auswahl des Leiters der olympischen Ausgrabungen lediglich fachwissenschaftliche Gesichtspunkte maßgebend seien, politische Erwägungen hinter diesen zurücktreten mußten* : DAI 34-04. フューラーは、ヴィーガントの説明に従い、オリンピア発掘責任者の選択には、ただ専門家

的観点が基準であり、政治的考慮は、背後に退かねばならない、という見解を擁護した)。発掘の調査結果は、あらゆる予想を超えており、完全な成功であり、この発掘は、世界に対しドイツ考古学と学問の能力を証明するという所期の政治的目的を遂行したのであった。宣伝の効果は、非常に重要と考えられていたので、戦争が勃発し、ギリシアがドイツ軍によって占領された1941年以降でさえも、〈形式的であれ *pro forma*〉オリンピア発掘は継続した。

### ゲルマン研究

DAIが、学問的実力の顕著な実例として見られるという体制の要請は、古典考古学研究を推進する助けとなったが、また同時に研究所の他の一古典古代ではない一研究領域へ増し加わる支援は、研究所の学術的側面を変えてしまう恐れがあった。研究所の国外部門でさえ、その国家的義務を怠っていると非難されていた。

研究所は、一度ならず〈人種関連の研究 *Rassenforschung*〉に加わるべく迫られた。1937年に、例えば、教育相は、「ギリシア的現象の展開に至るまでのインド＝ヨーロッパ人の寄与 *Indo-germanischer Anteil am gesamtgriechischen Phänomen*」の掘がりを確定すべく、ギリシアでの考古学的諸計画の中に人種論的生物学を統合しようと図った（1937年1月、教育相からの覚書 DAI 10-42）。下記のように彼が論じているような理由から、研究所の方針のいかなる変更も全く不要であると、はっきり遠慮なく〔\*所長の〕シェーデは拒否した（1937年2月4日付き教育相への書簡：DAI 10-42）。

人種論的調査研究の問題が、ドイツの考古学での注目の問題と何時もされてきましたが、はっきりと証明され得ていない調査結果を公表することを、当該学者たちは当然躊躇しました。

ここで、シェーデは、彼に対立している者自身のレトリックを賢明にも武器として利用し、公然と皮肉交じりに、次のように論じた。

当研究所が活動している諸国が、彼らの人種への彼ら自身の調査研究を普通に行い、彼らが、最も承認し得る結論であると考えているに至っている際には、こ



これらの問題では、特に注意深くあらねばなりません。

教育相は、この問題はそのままにした (Kyrieleis 1979:49)

このような人種関連研究を避ける研究所の方針での例外は、アテネのケラメイコス墓地で発見された頭蓋骨のエミール ブライティンガー Emil Breitingner による分析であった。その調査結果は、1939年発掘の公式調査報告書に公表された (Breitingner 1939)。シェーデは、その公表に彼の同意を与えたが、その問題の明確な評価は、難しい。シェーデの厳密なスタンスから見れば、明らかにナチス・イデオロギーによって鼓舞されているブライティンガーのそのような研究計画を支持することは、研究所は、〈人種問題 *Rassenfrage*〉を拒絶してはいない、ということの証しのために過ぎなかったように私には思えるのである。私が知り得た限りでは、DAIは、この種の人種学的研究を、二度と全く企画していないという事実は、この結論の別の証拠かも知れない。

地中海地域におけるゲルマン諸部族の歴史的遺物や工芸品にいっそう大きな関心を示すことが、体制の諸要求に研究所が忠誠であることを証しするために見つけた別の方法であった。〔＊ゲルマン諸部族の〕歴史的遺物のイタリアやスペインとの優れて政治的な諸関連は、この分野での調査研究を強化する機会を与えた。上述されたように、1920年代から初期中世時代の考古学と並んでよりいっそう初期時代を加えることで、ギリシア・ローマの古典古代という伝統的な領域の外部に、研究所はその活動範囲を拡げようとしていた。現実的契機は、外部からではあったけれど、民族移動時代を新たな研究分野として定める決定は、研究所の従来もあった方針と完全に一致していた。

だが、實際上の種々の可能性は、大変限られていた。ギリシアとかトルコで執られていた方策とは異なり、イタリアは、全く外国の研究所に発掘許可を与えなかったし、二つの全体主義体制の間の親密な関係でさえも、ドイツを例外扱いすることは出来なかった。この新たな方針を確定するに当たっての別の難しさは、ドイツのナショナリズムに対するイタリア人の態度であった。彼らは、イタリアへのゲルマン諸部族の移動のドイツの研究は、ローマ人は、一暗に、全てのラテン民族は一墮落し、かくして北方からやって来た力に満ちた民族によって正当にも脇に押しやられたのであった、という結論に必然的に至るであろうことを恐れ

ていたのだが、それは理由なきことではなかった。

1936年の秋以来、研究所のローマ支部の正式プロジェクトとして、この新たな研究領域を定めるいっそうの努力がなされていた。「ローマ支部は、イタリアの先史時代の研究に熱心になっている・・・現在、我われは、相応しい国民の手中にこうしたプロジェクトを指揮し得る力をなお所持している」とシェーデは、その後暫くして記していた（1937年1月13日付きL.Curtius宛書簡：DAI10-32）。しかしながら、務めを果たすというシェーデの試行は、部分的にしか成功しなかった。

1937年3月、教育省は、「イタリアにおけるゲルマン人たちの生のあらゆる事実の記録化」が着手されねばならない、と布告した(*Erfassung aller Lebenszeugnisse des Germanentums* DAI 43-01)。この企画の履行責任は、ジークフリート フックスに負わされた。イタリア国民の感情を損なわないようにするために、ゲルカンを引用して、イタリア国民が、〈蛮族の群れ〉となお見做していたゴート族ではなくむしろランゴバルト族に集中することが決定された（1937年4月16日付きシェーデへの書簡：DAI 43-01）。作業は、迅速に進み、最初の出版物は、1938年春に現れたが、一それは、金箔の十字架に関する印象的なものであった（Fuchs 1938）。

ゲルマン文化を強調し過ぎることは、研究所の国外支部の中で最古かつ最も重要な支部の学術的側面に有害な結果を齎し得ることに、シェーデが気づいていたことは疑いない。彼が当局者たちに上手く確信させた中和的方法とは、研究所の伝統的な古典古代の強調と同時に進めつつ、新たな調査研究に加えられた領域として、それは見られるべきであるというものであった。

こうした二つの全く異なった分野間のバランスを取るための努力をしている最中、予期せざる助けが、〈SSの父祖の遺産〉から再度齎された(Kater 1974:23-4; Losemann 1977:136-9)。1938年12月、両組織は、相互にその調査研究を支援するということを記した合意文書が作成された。〈父祖の遺産〉は、イタリアにおける発掘を実施する許可を得るに際し、研究所を支援することを約束し、一方、フックスは、研究所の雑誌に定期的に論文を掲載することに同意をした。これは、逆説的のようには見えたと、SS組織とのこの提携が、考古学的な証拠をゲルマン民族の優秀性を証明する一手段と見做していたナチス・イデオロギーのいっそう

正統的な代表者たちから研究所を守る助けとなった。DAIと〈父祖の遺産〉との協力で、イタリアに—ギリシアにも同様な—彼自身の研究所を設立するというローゼンベルクの計画を妨げ、またイタリア国内でのゲルマン文化研究を、研究所が怠っているという批判をかかわすことが、研究所には可能となった。

この分野へのDAIの進出の絶頂は、フォルリの近くのガレアタのテオドリックのいわゆる狩猟小屋という小規模で、基本的には重要ではない発掘調査であったが、それは、外交的な理由から地方の〈考古学監督局 soprintendenza〉との合同で実施された。1942年秋一ヶ月に及ぶ発掘がなされ、その調査結果は、12月の初め、ベルリンで持たれたヴィンケルマン講座でフリッツ クリシェンFritz Krischenにより発表された (Krischen 1943;Lévêque 1947)。間もなく、政治状況により、あらゆるこれ以上の諸計画は没になった。

研究所によるゲルマン研究の促進との関連で、スペイン支部が創設された。この件は、ある期間、議論されてきたのであるが、1940年3月までは承認されなかった。しかし1943年11月、更に3年間掛かったが、—非常に小規模な研究所ではあったが、開所式がなされた (Grünhangen 1979;125-35)。

マドリッド支部の創設は、二つの理由から興味を引く。ローマ支部では、ゲルマン文化研究がますます目立って来る一方で、古典考古学に対する伝統的な強調となお競い合わねばならなかったが、スペイン支部は、専門的に新たな分野だけに専念し、ローマ時代とか或いはその地方のより古いイベリア文化の歴史的遺物は、少なくともその当時は、対象外にされ得るものと見做された。この点を守るために、支部長は、古典考古学者ではなく、中世史家ヘルムート シュルンク Helmut Schlunkであった。

戦争の勃発は、この新たな支部の開所を遅らせはしたが、妨げにはならなかったという点も、同様に注目に値する。こうした状況下では、重要な学術的成果を挙げることは、支部には殆んど期待され得ないことであったが、当局も研究所も、その何れも、政治的発信としてのその重要性を良く理解していた。即ち、戦争の真只中でも、ドイツ帝国は、偉大なる文化的伝統の国家として、その役割を維持することを望み、かつ可能とするということを学界にまた一般に公に宣伝する絶好の機会を、それは提供していたのである。

## 諸国間の友愛

しかし、マドリッド支部を創設する決断には、また別の側面もあった。上述のごとく、DAIは、1933年以前に、古代世界のいっそう完全な姿を得るために古典期以後にも、また焦点を合わせようと決意していた。戦争の勃発と共に、政治的理由が、学術的考慮を上回った。即ち、主人役の国家の文化的アイデンティティーにとって最重要な時代であるこの時代にその関心を向け直すことで、考古学が、ドイツ帝国とその同盟諸国の間の結びつきを強めることを可能とした。一方、ファシスト国家イタリアでは、ローマ帝国 *Imperium Romanum* が、参照さるべき基点を供し、スペインでは、民族移動時代が、その地域の歴史において意義深い時期と見なされた。同様に、初期イスラム文化が、エジプトやトルコの国民的アイデンティティーの中心であった。また一方ギリシアでは、ビザンチン時代がそれであった。ドイツ文化政策の背後にあって、それを動機づけている力とは、これら諸国の初期中世時代に特別な注意を払うということであり、かつそうすることで、これらの国々の過去の歴史に敬意を払うことにより、ドイツ帝国は、その国家の現在の地位の正当性を認めていることを宣伝することであった。戦争中に考古学研究所によって、或は考古学研究所の名において実施された諸活動の大部分に見られるべきことは、こうした背後の事情には反したものである。研究所の全ての支部は、この指示に従わねばならないと、明確に述べられてはいたが、アテネ支部のみが、実際このことを、少なくともある程度まで履行したに過ぎなかった。1940年9月までに、支部内に〈ビザンチン部門〉を具体化することが決められ、ドイツのギリシア占領6ヶ月後、1941年11月、三つの学術的部課が認められた(Kyrieleis 1979:50)。しかし部課長職、しかも半年間務めるだけの、を充足することが出来たに過ぎず、相応しい研究者たちを欠いていたために、たとえ少々不都合であっても、この仕事のための極端に寛大な財政的処置が取られた背後に在ったのは、やはり政治的理由だけであったことが、内部メモから明々白々である。

## 結論

ナチス体制期にその学の自立性を維持してゆくために、DAIは、国内と国外でのその活動のためには、むしろ相異なる戦術を取らざるを得なかった。旧来の古

典学者の研究所の一部として、RGKは、新たな国家主義的イデオロギー、特にドイツ先史時代の研究は、アーリア人種の卓越性を証明すべきであるという広く行きわたった見方に関して、同意する意思も、その能力も持たないとナチス党の支持者たちが正しく判断していた1933年以降になると、〈ローマ＝ゲルマン委員会〉は、国家的義務を怠っているという批判は、いっそう妥当性を帯びて来た。にもかかわらず、その最小限の変更だけで、DAIはRGKの地位を維持することが出来た。多くの理由が挙げられるが、恐らくナチス当局の別々のサブセクション、殊に〈ローゼンベルク当局〉と〈SSの父祖の遺産〉間の競合が、最も重要な理由であった(Bollmus 1970:23-50;Kyrieleis 1979:47)。

研究所の国外支部は、妨害とか〈画一化〉に準えられる程には、服することは無かった。〈従来の立場 status quo〉を維持するべくDAIによって取られたイニシアティブと、政権が、自らの目的のために研究所の調査研究部門の知名度を利用した遣り方の両者の違いを見ることは、かなり容易である。この文脈で、二つの側面が、殊に興味を引く。

民族移動時代に関する研究に対する重要度が増し加わったことと、ギリシア・ローマ文明は、余り強調されるべきではないという民族主義集団の要求とは、確かに重なっていた。

しかしこの展開を全般的な〈ゲルマン化〉と同等視することは、誤っているだろう。DAIは、既に1920年代に、その調査研究の計画を古典考古学の領域の外に拡張始めていたのであり、故に地中海地域のゲルマン研究を含むことは、なにも研究所の全体的方針の変更を成すものではなかった。この点は、スペイン支部の場合に特に明白である。ここでは、イベリア半島におけるゲルマン人の歴史遺産の研究が、ナチス体制の文化政策の一環として1943年に始められたのであるが、今日でもなお、この分野は、マドリッド支部の重要な研究領域を成している。

全く異なる諸理由で体制側から賛同されたり、現実的支援さえ受けたりした研究所が別に率先して為したことも在った。既存の発掘作業は、継続出来たのであるが、時に多額の予算を以ってなされたものもあった。むろん、これは、ナチスは、〈文化国家〉として、ドイツの歴史的伝統に敬意を抱いていると世論や、特に外国人たちを納得させようとしたからであった。実際、初期キリスト教時代やビザンチン時代、またイスラム世界のような、公式のナチス・イデオロギーでは

殆ど或は全く価値がないものとされている時代の文化研究をもDAIの活動領域に含ませ、拡大させることで、鷹揚であるという自画像をナチス体制は描こうとしていたのだ。地中海地域にある研究所の各支部を、宣伝目的のために利用することを体制が望んでいたが故に、こうした拡大は可能になった。しかし、再度云うが、これらの新たな諸計画は、研究所自体のプログラム拡大という以前からの方針と合致したのだ。このような局面が、高度な学術上の水準と共に、戦後の研究所の再生に寄与したのは疑いないことである。

## 原注

この論考は、私のモノグラフ『*Das Archäologische Institut des deutschen Reiches Zwischen Forschung und Politik. Die Jahre 1929 bis 1945*』(Junker 1997)の要約である。ここでは、概略しか記されていない諸々の出来事が、詳細に史料的に跡付けられている。利用された公文書類は、ベルリン・ドイツ考古学研究所、ベルリン国立図書館及び連邦公文書館ポツダム分室から得られる。

〔略記号〕

DAI Deutsches Archäologisches Institut

DAI xx-yy Documents in the administrative archive of the Deutsches Archäologisches Institut Berlin

RGK Römisch-Germanische Kommission, Frankfurt am Main

StB Staatsbibliothek, Berlin, Handschriftenabteilung, Bequest Gerhart Rodenwaldt, folder no.595 (letters to Martin Schede)

〔文献表〕

Arnold, B. 1990, The past as propaganda: totalitarian archaeology in Nazi Germany, *Antiquity* 64, 464-478

*Bericht über die Ausgrabungen in Olympia : Herbst 1936-Frühling 1937. Supplemento to Jahrbuch des Deutschen Archäologischen Institut* 52(1937)

Bittel, K. 1979. Abteilung Istanbul, in Bittel et al.: 65-91.

1988a. Theodor Wiegand, in Lullies & Schiering: 154-5.

1988b. Martin Schede, in Lullies & Schiering: 220-21.

Bittel,K., F.W.Deichmann, W.Grünhagen, W.Kaiser, T.Kraus & H.Kyrieleis. 1979.

*Beiträge zur Geschichte des Deutschen Archäologischen Instituts von 1929 bis 1979.* Mainz: Philipp von Zabern.

Bollmus,R. 1970. *Das Amt Rosenberg und seine Gegner: Zum Machtkampf im nationalsozialistischen Herrschaftssystem.* Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt.

Breitinger,E. 1939. Die Skelette aus den submykenischen Gravern, in Kraiker & Kübler: 223-55.

Curtius,K. 1950. *Deutsche und antike Welt: Lebenserinnerungen.* Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt.

Evans,C. 1989. Archaeology and modern times: Berus's Woodbury 1938 & 1939, *Antiquity* 63; 436-50.

Fuchs,S. 1938. *Die Langobardischen Goldblattkreuze aus der Zone südwärts der Alpen.* Berlin: Gebruder Mann.

Grünhagen,W. 1979. Abteilung Madrid, in Bittel *et al.*: 117-65.

Hausmann,U. 1988. Gerhart Rodenwaldt, in Lullies & Schiering 236-7.

Jantzen, U. 1986. *Ein hundert Jahre Athener Institut 1874-1974.* Mainz: Philipp von Zabern.

Junker,K. 1997. *Das Archäologische Institut des deutschen Reiches zwischen Forschung und Politik. Die Jahre 1929 bis 1945.* Mainz: Philipp von Zabern.

Kaiser,W. 1979. Abteilung Kairo, in Bittel *et al.*:93-116.

Kater,M. 1974. *Das 'Ahnenerbe' der SS 1935-1945. Ein Beitrag zur Kulturpolitik des Dritten Reiches 1933-1945.* Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt.

Kraiker,W. &K.Kübler. 1939. *Die Nekropolen des 12. bis 10.Jahrhunderts. Kerameikos: Ergebnisse der Ausgrabungen I.* Berlin: Walter de Gruyter.

Krischen,F. 1943. Der Thederichpalast bei Galeata, *Archäologischer Anzeiger* 459-72.

Kyrieleis,H. 1979. Abteilung Athen. In Bittel *et al.*: 41-64.

Lévêque,P. 1947. Le palais de Théodoric-le-Grand, à Galeata, *Revue archéologique* 28(2): 58-61.

Losemann,V. 1977. *Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Geschichte des Faches Alte Geschichte 1933-1945.* Hamburg: Hoffmann & Campe.



- Lullies,R. 1988. Georg Karo, in Lullies & Schiering: 181-2.
- Lullies,R. & W. Schiering(ed.). 1988. *Archäologenbildnisse: Porträts und Kurzbiographien von Klassischen Archäologen deutscher Sprache*. Mainz: Philipp von Zabern.
- Marchand,S. 1996. *Down from Olympus. Archaeology and philhellenism in Germany, 1750-1970*. Princeton(NJ): Princeton University Press.
- Naumann,R. 1988. Armin von Gerkan, in Lullies & Schiering: 226-7.
- Rieche,A. 1979. *Die Satzungen des Deutschen Archäologischen Instituts 1828 bis 1972*. Mainz: Philipp von Zabern.
- Rodenwaldt,G. 1929. *Archäologisches Institut des Deutschen Reiches 1829-1929*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Unverzagt,M. 1985. *Wilhelm Unverzagt und die Pläne eines Instituts für die Vorgeschichte Ostdeutschlands*. Mainz: Philipp von Zabern.
- Watzinger,K. 1944. *Theodor Wiegand: Ein deutscher Archäologe*. Munich: C.H.Beck.
- Weitzmann,K. 1994. *Sailing with Byzantium from Europe to America. The memoirs of an art historian*. Munich: Editio maris.
- Wenk,S. 1985. *Auf den Spuren der Antike: Theodor Wiegand, ein deutscher Archäologe*. Bendorf: Stadtverwaltung Bendorf.
- Wickert,L. 1979. *Beiträge zur Geschichte des Deutschen Archäologischen Instituts von 1879 bis 1929*. Mainz: Philipp von Zabern.
- 出典：Research under dictatorship: the German Archaeological Institute 1929-1945. *Antiquity* 72 (1998) : 282-292所収. Fiona Healyによる英語訳。

〔訳者付記〕

この2本の論考は、いずれも180年に達しようとする歴史を誇る「ドイツ考古学研究所」に関するものである。ヴァイケルト論文は、その成立期と主なる19世紀から20世紀初頭の発掘と報告作業を中心としている。一方ユンケル論文は、ナチス期の研究所の置かれた状況とその対応についてのものである。両者を読むことで、相補うように思う。

しかしながら、ヴァイケルトの論考は、「はじめに」に記すごとく、戦争直後の混乱した状況を垣間見させ、その混乱の因って来たる原因であるナチス期に関しては、当然不十分である。ヴァ

イケルト論文の中心は、研究所の礎石が置かれる創設期、まさに〈ローマの春〉の描写であろうか。若き優れた考古学徒たちの活動と共に、考古学通信協会設立にいたる労苦が描かれているが、それはまた、十九世紀初頭、ドイツ近代歴史学成立の源流とも言うべき大きなうねりがこのローマに及んでいることを知ることであろう。その後百年に及ぶ協会＝研究所の発掘調査と調査報告は、その基で歴史学の発展と方向に大きな影響を与えて来たとも言えるだろう。しかし民間の協会から、主には財政的理由から公設の研究所に変わることで、また別の問題が生じ、それが二十世紀前半に大きな苦難を研究所に遭わせることにもなる。この苦難の時期がユンケルによって解明されているわけであるが、両者のナチス期の見方には、幾ばくかのズレが感じられ、それがまた興味を引く。

ユンケルの論考は、〔註〕にもあるように、モノグラフの要約であるから、細かい批判は、避けるべきであろうが、ユンケルのDAIの立場に立つ主張を理解しつつも、DAIがかの「悪名高き」親衛隊とその長官ヒムラーと親しい関係にあった、云々という記述には、様々な思いが過ぎらないであろうか。ドイツ考古学研究所の、いわば光と影をこれら論考から覗くことが出来るようにも思う。それはまた政治と学問の自律の問題とその重さとも言えようか。

なおナチス期の歴史家、歴史学に関しては、優れた書物を邦訳で読むことが出来る。

・Frank-Lotkar Kroll. *Utopie als Ideologie*. 1998.邦訳、フランク＝ロタル・クロール著小野清美他訳『ナチズムの歴史思想 現代政治の理念と実践』2006、東京。

・Schöttler P.(Hrg.) *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918-1945*. 1997. 邦訳、P.シェットラー編 木谷勤他訳『ナチズムと歴史家たち』2001、名古屋。

これらはいずれも個別的テーマを扱っているが、前者は、歴史思想がテーマであり、ローゼンベルク、ヒムラーが個別に扱われ論じられている。そこでは具体的に「ローゼンベルク当局」は論ぜられてはいないが、その背景とも言うべき彼の思想を詳細に明らかにしている。また、ヒムラーの項では、「父祖の遺産」に関して僅かであるが論じられている。後者は、個別的歴史家を取り上げられ、またそこに出るナチス期の諸団体の索引もあるが、ドイツ考古学研究所は見当たらない。またローゼンベルクの「帝国研究所」も話題にならない。しかし「ローゼンベルク当局」（訳書では、ローゼンベルク機関）、「父祖の遺産」（訳書では、いずれも祖先の遺産）は散見され、また、訳者による注にそれらの解説が記されており大変参考になる。第一章「権力を正当化する学問としての歴史学」（シェットラー著）と木谷氏の「訳者解説」はここの問題にも触れあうものがあり、必読のものである。

なお原著者に関しては、ヴァイケルトについては遺憾ながら未詳である。ユンケルは、マインツ、ヨハンネス・グーテンベルク大学古典考古学科教授であり、別に「Zur Geschichte des Deutschen Archäologischen Instituts in den Jahren von 1933 bis 1945. 1998」というコロキウムで発表されたドイツ語の論文もあるが、これも〔註〕にあるモノグラフの僅かに修正を加えた概略であることは彼自身が記している。

訳者が、考古学には門外漢でありながらもローマ史研究の末席を汚しているものであるが一、こうした訳業を思い立ったのには、先の問題を考えさせられるという以外に、過年度2期に亘り、この様な風雪の歴史を経てきた「ローマ・ドイツ考古学研究所」にその図書館を利用した（と言うのも実際は烏滸がましく、触らせて貰ったぐらいだろうか・・・）研修が許されたという個人的感慨も強い理由である。

創立150周年の記念式典、記念講演と国際コロキウムが、功労者と共に世界から有数の研究者たちを集め、ベルリン国際会議場で開かれたのは、1979年4月であった。当時の西独大統領ワルター・シェールも式辞を述べている。またシャルロッテンブルグ城では「ベルリンと古代」と題された考古学展も開催され、コロキウムには日本から佐原真氏が参加、発表をしている。これらは、立派な150周年記念誌として公刊されている。（*150 Jahre Deutsches Archäologisches Institut 1829-1979 Festveranstaltungen und internationales Kolloquium 17.-22. April 1979 in Berlin*: 1981, Mainz, Philipp von Zabern.）また同じく、Philipp von Zabern社から、10巻になる「*Das Deutsche Archäologische Institut Geschichte und Dokumente*」が1979年から1986年にかけて出版され、第7巻はローマ・ドイツ考古学研究所の図書館に関するものである。ヴァイケルト論文の付記で利用した書物も同様にこの150周年を記念して、ドイツ考古学研究所友の会（テオドル・ヴィーガント協会）によって発行されたものだ。研修期間中から、研究所の歴史に興味を持ち、書籍を書庫で探していたのであるが、ローデンヴァルトの原著を手にしたときの感動は忘れられない。この本を写真を以って一部紹介したのが友の会発行のものである。そして、内容的にも長さからも適当と考えたのが、ヴァイケルトのものであった。それ以来時間が過ぎたが、ユンケルと合わせることが出来、幸いであった。

また思うにわが国の古代史ないし古典学学徒は、少なからず当研究所あるいはその書庫を利用し、研鑽を積まれているように思うが、寡聞にしてわが国での紹介は、下記の角田文衛氏による以外は、あまりなされていないのではないか。シュリーマンのトロヤ等の発掘はわが国でも有名であるが、その背後に考古学研究所の能力、人材がいかに必要であったかはあまり知られていな

い。例えばD.トレイル著周藤芳幸他訳『シュリーマン 黄金と偽りのトロイ』の第13章では、研究所の所員デルプフェルトが興味深く論じられている。わが国では、戦前期昭和10年代半ばドイツ考古学研究所ローマ支部に留学、研鑽を積まれた角田文衛氏により『世界考古学事典』下巻(1979年、東京)並びに『古代学の展開』(2005年、東京)に、ヨーロッパ考古学史が著されているが、そこにドイツ考古学研究所とその深い関係者たちに関する記述を読むことが出来る。また後書第一章「考古学の定義とその本質」においても、ゲルハルト、ミハエリス他について触れられている。

ウンケル論考は、英訳されたものであるが、場合によって原文(ドイツ語)と訳文(英語)が併記されている箇所、また原語がそのまま利用されているもの等が見られる。この邦訳では、括弧を利用したり、原語のドイツ語を併記したり、イタリックを用いたりと適宜処理した。なお「研究所」は、本文では、大文字でInstituteとされているが、括弧で括るのも煩わしく、文脈的に誤解が生じるとも考えられず、単に研究所とした。なお文中括弧内の\*印を付けた文は、文脈的にあった方が読みやすいかと考え加えたものである。また、副題を主題と変えた。十分考え、熟慮をしながらも、なお誤訳等のあやまちは避け難い。どうか忌憚のないご指摘、ご批判をお願いいたします。

最後に、まことに拙く、貧しい翻訳ではあるが、異国の地ローマでの研修中、研究上のアドバイスのみならず生活上の配慮さえていただいた同志社大学名誉教授浅香正先生、早稲田大学教授小林雅夫先生に、感謝の念を込め捧げることをお許しいただきたい。